

2024 年 3 月期 決算説明会 質疑応答要旨
(2024 年 5 月 15 日開催)

オルガノ株式会社

本資料については、当社判断で簡潔にまとめたものとなりますこと、予めご了承下さい。

Q 前期比で受注が減少しているにも関わらず売上が増えている理由を教えてください。

A 大型案件のリードタイムが1年半から2年あり、前期以前に受注した案件の工事進捗が寄与したことで、前期比で受注が減少した中でも売上が増えている。

Q 販管費が増加した主な理由を教えてください。

A 従業員への還元などの人件費の増加や研究開発費の増加、また業務効率化に向けた投資などによる。

Q 営業利益が前期比・計画比とも大幅に増加している理由を教えてください。

A 前期比としては増収効果によるもの、もう一つは計画比とも共通する理由になるが、資材や原材料価格の高騰分の価格転嫁が想定より進められたことによる。

Q 2025 年 3 月期の営業利益計画において、売価やコストの面でリスクがないか教えてください。

A 資材や原材料価格の上昇や工事単価を含む人件費の上昇を計画には織り込んでおり、利益の下振れリスクは現状考えていない。

Q 今期 180 億円と見込む設備保有型への投資について、今期だけではなく来期も投資が続くものとするが、その投資総額について教えてください。

A 180 億円という投資計画額は複数案件の合計額として見込んでいる。それぞれ複数フェーズで進むものと想定する中で当面のものとして見込むものであり、それ以降の投資総額はまだ分かりかねる。

Q 2024 年 3 月期に中国の受注額が前期比で大きく減少した要因は、大口案件の有無や受注時期のズレによるものか、若しくは中国の半導体製造装置市場が拡大しなかったことによるものか教えてください。

A 2023 年 3 月期までの受注残が大きく繁忙であり受注を手控えたこと、米国による対中輸出規制強化により大型案件の投資時期のズレなどが影響している。

Q 2030 年度の営業利益率目標値を既に達成しているが、計画策定時に織り込めなかった要因を教えてください。また、この収益性の継続性や更なるアップサイドの可能性についても教えてください。また、期間中の中計の上方修正は視野にあるものか教えてください。

A 資材の長納期化や価格の高騰が相当進んでおり、その分の価格転嫁をどれくらい見込め業績に織り込めるか難しい面があった。また、半導体関連の設備投資が国内外で活発に続いたため、当初の想定より案件の選択的な受注が進んだこともあって営業利益率が想定を上回る結果となった。2030 年度の営業利益率目標を前倒しで達成できた形となったが、今後も半導体向けの活発な設備投資が予想されるため、当面は現状の営業利益率の水準を維持できるものと考えている。

中期計画については毎年 3 か年計画をローリングしており、業績の動向や見通しに応じて各年度の目標が修正される可能性がある。

Q M&A について言及していたが、具体的な対象分野・地域などのイメージはあるか。

A 海外展開を進めて行く上での販売網や当社技術を補完できる技術を有する企業、またはエンジニアリング能力の強化に有効となるデジタル技術をもつ企業など、様々な分野を視野に入れて検討しており、地域としても国内・海外を含めて想定している。

Q ソリューションビジネスが今後 3 年で 200 億円増えるとの見通しだが、このうち設備保有型の伸びはどの程度か。またメンテナンスや消耗品交換については、半導体工場などの稼働に連動することからプラントと比べ計画見通しが立てやすいと考えてよいのか。

A 設備保有型は国内案件を想定している。契約形態や契約期間などは顧客のファイナンス戦略にも左右されるため、当社としては今後の見通しについては申し上げにくいですが、安定収益が見込めることや、設備の運転管理や維持管理など新しい知見の蓄積にもつながるため、機会を捉えて積極的に拡大を進めたいと考えている。メンテナンスや消耗品交換などについてはプラントに比べ収益の見通しは立てやすい。

Q 今期は中国向けの受注が回復する見通しだが、どのような案件を想定しているのか。政治的なリスクを含め中国向けの受注展開を教えてください。

A 米国による最先端半導体分野への輸出規制があるため、技術開発や投資が活発に続いているレガシー分野の案件を想定している。実際の案件対応においては、輸出規制への抵触有無やその動向などを確認しながら慎重に進めていく。

本資料における業績予想等の将来に関する記述につきましては、現時点で入手可能な情報に基づくものであり、リスクや不確実性を含んでいるため、実際の業績はこれと異なる可能性があります。

以 上